

昭和二十六年二月十五日發行
昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可

(通第二十三卷)

慈

光

第三卷・第二號

目

舍衛城の悲劇とカピラ城の滅亡……花田正夫 (1)

大悲心の成就……白井成允 (5)

次

信味點滴……編者 (12)

舍衛城の悲劇とカピラ城の滅亡

花田正夫

ビルマの佛伝によれば佛陀成道の第三十八年に王舎城の大悲劇がおこつた。即ち提婆にそのかされた阿闍世王が父王を獄中に餓死せしめ母后を深く幽閉した。然し父ビンバシヤラ王は早くから佛陀に帰依してゐたのでその業苦の中にも八齊戒を日々に守りつつ安らかに死に就いた。母イダイケは佛の親しき御教化をかうむつて彌陀佛の本願に帰し廓然として大悟し、やがて阿闍世王も機縁熟して大懺悔の人となり、佛陀を訪ひ佛慈に浴して「無根の信」を獲て大慶喜の人となつた。かくて生涯を孝けて佛教の外護者となり、国は盛大を極め、徳政は全印度に讃へられた。

これに反して佛陀成道の第四十年、即ち王舎城の悲劇から二年目、佛陀御年七十五歳の御時、有名な祇園精舎の鐘の音の聞きとれる距離にある舍衛城に大悲劇がおこり次いで佛陀の御生国カピラ城の滅亡といふ悲惨極まりのない悲劇がおこつた。

時はすでに二千五百年の昔、所は遠く印度ガンヂス河のほとりの出来事であつて詳細にその顛末を誌すことは出来ない佛が、伝によつて大略を記し、無数の生命を塔して示された

「王はそれかと言つて道を求め佛を敬ふ心を起さうとはせず、自分の我慢を早く実行しやうと考へ「それで佛は如何なるものの供養を受けられるか」と重ねて御伺ひ申した。佛陀は早速「敬ひの心のある者の供養と、釈迦族の者、比丘の親戚の者の供養以外は受けぬ」と答へられた。

権勢ならぶもののない大国の王としてはこれは堪え忍ぶこととの出来ぬ事であつた。若し佛陀でなければ一刀兩断にしたであらうが、世間の眼と言ひ、佛の御徳と言ひ、双向ふことも出来ず、かと言つて道を求めるすべすら知らぬ王は、退いて大臣等と相談つた末に、釈迦族の王女を迎へて妃とし親戚となることによつて大供養を完うしやうと謀つた。かくて王の使者は釈迦族の本拠カピラ城に走つた。

当時のカピラ城は、佛の御父淨飯王はすでに逝かれ、佛の御子ラゴラが出家し、王位をついだ佛の異母弟ナンダも出家したのちとて佛の御従弟にあたるマハナーマーが城主であつた。大国舍衛城主からの納妃の申込は世の常なら大きな喜びであつたが、釈迦族は血統の純潔を尊び且つ唯一の誇りとして居たのでこのことは大難問であつた。

(註) 佛陀は「萬川海に入りて一味なるが如し」と当時の印度における階級差別の厳しさも佛の御徳の力で自然に融けた世界に住して居られた。最も卑賤な者とされたセンダラ種の肥波人夫も救ひ上げられて卑屈の垢は洗はれ王侯も快く拜する尊者と轉化してゐる。然るに御生国の有縁の者は皆佛の徳に感化せられたが、未だ徳化に充分浴し得ぬ

大悲劇を通して活教訓を頂き、又その事件を一貫して注がれた佛陀無限の悲涙によつて、我等が迎ふべき永劫の道を仰ぎ度いと思ふ。

カピラ城滅亡の遠因

すべて果のあらはれる前に遠い因がある、カピラ城滅亡の二十年前にその種は深く地に下されたのであつた。

當時佛陀は舍衛城の近く祇園精舎にましまして多くの比丘達と道を修めて居られた。舍衛城主ハシノク王は、スダ長者の供養をうける多くの比丘衆を眺めて、王も亦供養せんことを佛陀に申し出た。然し王は未だ佛道を求め敬ふ心は無いので、臣下に命じて供養の用意はしたが、供養主の王は城を留守にしてゐた。比丘達は城に入つたが、敬ふ心のない供養は佛弟子の受くべからざるものであつた。ハシノク王は須達長者の供養を受けても王の供養は受け給はぬ佛を責めてその由を問ひ奉つたとき、「敬ひ心のない供養は一切受けない、若し何に物は粗末でも敬ひの心からの物は喜んで受ける」と答へ

人々も多数残つてゐた。茲に人種の誇りと差別の心は未だ夫等の人々の心を融かしてはゐなかつた。このことがカピラ城滅亡の因となるのは誰か知り得たであらうか

カピラ城主を始め群臣は集つて密議をこらした末に一策をめぐらした。即ち王とセンダラ種の婢との間に生れた娘を王女と偽つて舍衛城主に送つた。

舍衛城主ハシノク王は詐られたとも知らずうるはしい釈迦族系の娘を得て喜びは一方ならず、第一の妃として寵愛した。そしてルリ王子も誕生して平和な歲月は流れ去つた。

ルリ王子はすでに十二歳になつた時、母の国をしきりに慕ひ、弓術も熾んなカピラ城を訪問しやうとした。母は秘密のあらはれるのをおそれしきりに制止したが王も勸めるので遂に侍臣をつけて王子をカピラ城に送つた。カピラ城主も色々と秘密の露見をおそれて万事に心を配つたが、ルリ王子が新築された大講堂を見出し何気なく講堂内に入り、しばらくして出やうとする一老婆が牛乳で王子の足跡を洗ひ乍ら「センダラの子によつて聖域が汚された」と叫びつづけて居るのを聞き、王子は大いなる侮蔑を受けた。早速復讐しやうと侍臣は憤つたが、王子はこれを制して「彼等をして乳で洗はしめよ、自分は何時か血を以つて洗つてやらう」と語り、釈迦族に対するぬぐい去ることの出来ぬ怨みの根は深く烈しく王子の胸に植えつけられた。

ルリ王子が舍衛城に帰り侍臣から一部始終を聞きとつたハ

シノク王の怒りも烈しく一時は妃とルリ王子を幽閉し釈迦族に復讐しやうとしたが幸に佛陀の慰安を受けて心ならず、これを機縁として道を求め法を樂しむ身と轉じて其場は安穩におさまつた。

業果遂に顯る

ルリ王子二十歳に成人した頃、王舎城の阿闍世王をそのかした提婆に等しい悪臣が舍衛城にも居て「王子よ釈迦族から受けた恥辱は忘れられたのか、父王ハシノクは釈迦族出の佛陀に帰依してゐられるから報復はせられないし、兄太子ギタも性優しく、又佛に帰依して居られるから駄目である。このまゝで過ぎては実に臍甲斐ない事である。早く父王と兄太子を殺害してルリ王子の手で復讐する外はない」と煽動した。

王子の胸に憎悪の念が一時に焰上し狂乱した。先づ軍をおこして父王の祇園精舎に参詣中をおそつて王冠を獲、ギタ太子も襲つて殺害した。父王は難を王舎城のイダイケ夫人、即ち王の妹の国に逃れやうとして途中で病死してしまつたが、篤く佛に帰依したギタ太子は從容として死に就いた。かくてルリ王子は王冠を獲て軍備をととのへカピラ城に攻め入らうと準備してゐた。

其時、祇園精舎に居られた佛陀は異様の苦悶を現はされた。「佛の尊顔、容姿は輝きなく、頂の光明は消失し、衣服また交色す」とある。阿難はその故を問ひ奉ると「釈迦族の滅亡も

カピラ城の最後

ルリ王の大軍が出動し始めた時、佛陀は独り炎熱焼くが如き中に、枯木の下にたゞすまれて大軍を国境の途上に迎へられた。王は佛を眞に尊崇する意もなかつたとは云へ、佛の尊容にうたれてか馬から下り「世尊よ何故に縁樹の蔭に憩ひ給はぬや」と問ひ奉ると「王よ、親族は枝葉である、枝葉枯れてその下何の蔭かあらう」と仰せられた。青年氣鋭の王もさすがに軍を進め難くそのまゝ引き還した。

(註)我々は事件が起ると自分の有利な側に味方をする、それでは火の燃えてゐる所に油を注ぐ結果になる。党にあつて党を超える者は誠に世に稀である。若し世尊が釈迦族出身の故をもつてルリ王を尠しても憎む心があつたら御老齡の世尊を殺害しないまでも無視したであらうが、釈迦族の悪もよく知られてゐるし、ルリ王の煩惱の暴流するまゝ、に動かすに居られない事も、亦その爲に多くの人命の断たれて行くことも知悉されて、悲心切々たる佛陀に接し奉つてはおのづと軍を還さずには居られなかつたのであらう。其後再び大軍が動いた時も世尊が困境に立たれてゐるので軍を還した。かくすること実に前後三回に及んだが第四回に至つて佛は「釈迦族は已に第一歩を誤つてゐる、今や如何とも出来ない」とて力及ばずして止み給ひ、遂に大軍はカピラ城を包圍した。

七日に迫つてゐる」と答へられた。

佛陀の御悲しみのあまりに烈しいので目連尊者は御前に進み出て「ルリ王の大軍を神通力をもつて打ち碎きませう」と申し出ると、佛陀は「空をして地となし、地をして空たらしめんと欲するとも、本縁のつなぐところ、此縁腐敗せず」と答へ給うた。そこで目連尊者は「それではカピラ城に金網を張つてルリ王の軍から防ぎませう」と申し出ると「業報には金網を張ることは出来ぬ」ときびしく答へ給うた。

(註)「天網恢々疎にして漏らさず」とは支那古聖の名言である。歎異抄に善惡の宿業について「兎毛羊毛のさきにぬる塵ばかりも、作る罪の宿業にあらずといふことあることなし」と祖聖は訓へ給うてゐる。自業自得は地上の鉄則である。然し我等迷へる者の常として自業を持ちながら自得、からのがれたいとあせり、苦しみ、迷うてやまぬ。然し通力をもつても碎き得ず、金網をもつても防ぎ得ないのが業報である。嚴然として犯すべからざる事実である。それは煩惱の習氣すら消えた佛陀のみよく知ろし召す世界である。然しここでよく我が身を省みると共に、よく味はねばならぬことは、逃れ得ず、碎き得ざる業報のまゝに彷徨せねばならぬ、そこを佛独りよく知ろし召すが故に、その業報の一つ一つに無限の御慈悲が注がれてゐる事実である。「衆生辺際なきが故に佛慈悲また辺際なくまします」業報のまゝに流轉極みなき我等のために、その何処何処までもつきそひ、つきまとひ、注ぎかけて下さる悲涙まします。

釈迦種の中には城を護つて勇敢に闘ふ者もあつたが、強国ルリ王の大軍に抗すべくもなかつた。城主マハナーマーは戦禍に家は焼かれ無数の人命が断たれて殲滅されて行く釈迦族の姿を視るに忍びずルリ王に最後の嘆願を申し出た。即ち「斯く一族が滅亡せられるのも皆自分の罪からであるが、せめて自分が水中に沈んでゐる僅かな間だけでも殺害を中止して下さいやう、これが自分の最後の懺悔である」と伝へた。ルリ王も快よくこれを許したが、何時まで経つても水中から浮び上らぬマハナーマーを求め探すと、城主は水中深く沈んで自らの頭髮を水底の石に結び、あはれ死骸となつてゐた。ルリ王もこの尊い最後に心打たれて懇ろに葬つて凱旋した。其日佛陀は「我今頭痛を患ふ。なほし石を以て圧する如く頭を以て須彌山を載くに似る」と侍者に告げ給うた。凱旋したルリ王の耳に、誰言ふともなく「王と王の兵は七日のうち死して地獄に落ちるであらう」との噂が聞えた。恐れおのゝいて王はバラモンに相談して色々と謹身してゐたが、七日目にアシラパテイ河に遊び、突風のために王と王の兵は残らず死滅した。

(註)王舎城の場合には悲劇の主の一人一人に佛陀の御徳が徹到してゐるが、舍衛城とカピラ城の場合は未熟のまゝに終り、底のない深淵に戦慄せしめられる。世尊はこの悲劇を通じて終始一貫、如何とも爲し得ぬ宿業を明らかに知ろし召されて、その業苦の一つ一つを我が御事と御感じ下されて、憐れみ、悲しみ、嘯み給ふ御心の限

りなく、はてしないのを拜する。
大聖逝きまして二千五百年、煩惱具足のわれらとして、さるべき業縁に催されては、舍衛城とカピラ城の悲劇を繰り返してやまぬ身ではあるが、その故にこそ法燈昭々として遍ね

大悲心の成就

白井成允

如来の作願をたつぬれば
苦悩の有情をすてずして
廻向を首としたまひて
大悲心をば成就せり

この和讃をいただいて心に浮ぶさやかな思ひを私は本誌第二巻第十号にのべさせていた。その時から既にこの「大悲心をば成就せり」といふ終の一句について述べ尽くさないもののあるのを感じてゐて何時か之を補はせていたかどうかと思つてゐた。ただ懈怠にして今に至り早くも年を越えてしまつた。何だか申しわけのないやうな氣でここにこの筆をとる。

大悲心とは佛の大慈大悲の心をいふ。慈しみの心を以て衆生に覺りの樂みを與へ、悲みの心を以て衆生の迷ひの苦しみを

せしめたまはる御心の成就せられたのである。

此の如き信卷の御釋は、經の「聞其名号」の聞といふ語を釈して、衆生が「佛願の生起本末を開きて疑ふ心有ること無き、是を聞といふ」と言ひたまふ所から導かれてゐる。佛願の生起本末とは佛が願をおこしたまひたる本と末との義であらう。その本とは蓋し衆生の苦惱である、苦悩の有情をすてずといふ大悲心である。その末とは蓋し衆生の安樂である、淨土に往生せしめたまふ大慈心である。大慈大悲の御心の成就とは即ち苦悩の有情を攝取して淨土に往生せしめたまふ御願のまどかに成らせられたのである。之を信じて疑ふことなきが聞である、其の名号を聞くのである。

名号といふについて祖聖は御齡八十八歳にして、自然法爾の深義を味ひ告げたまふに當りて先づ獲得名号の四字を一つ一つ味ひつ

「獲の字は因位のときうるを獲といふ。得の字は果位のときにうることを得といふなり。名の字は因位のときの名を名といふ。号の字は果位のときの名を号といふ。」

と告げてをられる。名号とはもとより南無阿彌陀佛を謂ふ。如来の大慈大悲の本願より名号を獲得したまふ。名を獲得たまふは法藏菩薩としての因位において修めたまふのである。号を得たまふのは阿彌陀佛としての果位において成らせたまふのである。因位にありても果位にありても名号は単に偶然にあらはれたものではなくして如来之を獲得したまうたもの

く地を照し、佛慈賑々として無窮に注がれてやむこと無くまします。「世尊よ、我れ一心に尽十方無碍光如来に帰命したてまつる」との天親論主の御告白こそは佛教徒全体の眼目であり生命である。

を抜き去り給ふ御心、即ち衆生を度ひて佛と作らしめ給ふ御心である。煩惱に狂ひ罪濁に汚れてゆくへも知らず迷ひ乱れる衆生の有様をみそなはして見捨てることができず、その一切を御自らの責として負ひたまひて、必ず之を無漏清淨なる境界に救ひあげずには止まずとし、たとひ身を諸の苦毒の中におくとも我が行は精進にして忍びて終に悔いじと誓ひたまひ、則ち衆生の苦悩の海の中に御身を捨てしめたまふ御心である。信卷に依れば、此を願作佛心といふ、度衆生心といふ、(佛とならしめんと願ひたまふ心、衆生をすくひたまふ心である)即ち是れ衆生を攝め取りて安樂淨土に生れしめんとする心である、是の心即ち大菩提心である、即ち大悲心である、と言はれる。是によりて大悲心とはわれ等衆生をおさめとりて覺りの淨き境界に生れしめんとする御心であられることが知られる、大悲心の成就とは即ちわれ等を淨土に往生

未

である。何故に獲得したまふたのであるか。自ら苦悩の有情

と同躰なるを感覺して之を捨て得ざるが故である。菩薩として必ず佛と成らんと願ひたせたまひし最初から其の御願ひの内容はただ一切の衆生を平等に同じき佛と成らしめんといふ事に存し、而して此の志願もし成らば我は決して佛の覺りをば得まいと誓はせ給うた。名を獲得たまふ因位の御はたらきは此の如くに誓ひ願ひたせ給ふ御はたらきであり、号を得たまふ果位の御はたらきは此の如き誓願の成就せられて南無阿彌陀佛と成らせ給ひたる御はたらきであらせられる。

名号の奥に名号を獲得せられし御はたらきを見せしめ、其の御はたらきの奥にかくはたらきいづる根源の誓願を顯はしたまふ。名号は誓願の頭はれ働らき成りたまふのである、誓願は名号の源である、躰である、意である。之によりてわれら名号を聞き念佛まうすとき即ち如来の誓願を感じ、誓願におさめられまゐらす。則ち「本願の名号は正定の業なり」と告げたまふのである。煩惱具足の凡夫、罪業深重のわれら、煩惱の狂ふがままに、罪業に乱るるままに、南無阿彌陀佛を憶念せしめられる。即ち此の狂ふ煩惱、乱るる罪業をみそなはして悲しみ痛み、御自らにわれらの業苦の責を負ひて、必ずわれらを此の業苦濁乱の境から救ひ出さんと誓ひたせたまひし大悲の御心に触れしめられる。われらに煩惱罪業の絶え間も無ければ、如来の大悲攝取の心光また絶え間も無くわれらを照らしたまふ。まことに本願の名号こそはわれらにとりて正定の業である。われら煩惱罪業に狂ひ乱れて行方も知らず

迷ひ漂ふより他にあり得ない者が、ただひとすぢに淨土往生の歩みを辿らしめられるもの、唯だ是れ南無阿彌陀佛の御名告りに如来の願心を開かしめられるからに他ならない。正定の業とはまさしく淨土に往生するに定まれる業の義なるが故である。如来のわれら苦惱の有情をすてずして、必ず淨土に攝め取らんと願をおこしたまへるや即ち南無阿彌陀佛の名号を成就して之をわれらに廻向したまへる御意、一声一声の念佛とともにのおのすからわれらに聞こへ来りくださるのである。是く如来大悲の願心は名号の廻向において、南無阿彌陀佛をわれらに恵み賜はるることにおいて、成就せしめたまへるのである。之を「ただ念佛して彌陀にたすけられまらす」といふ。

南無阿彌陀佛は衆生を攝め取りて淨土に生まれしめんといふ如来の度衆生心、願作佛心の顯現である、成就である。故に念佛は即ち彌陀の願心のままに攝め取られてあることであると共に、その願心はわれらをして淨土に生まれしめんと期せられてあることを思はなければならぬ。

然るに「親鸞におきてはただ念佛して彌陀にたすけられまらすべし」とよきひとのおほせをかふりて信するほかに別の子細なきなり」と告げられた歎異抄第二章の御告白は直ちに「念佛はまことに淨土にむまるるたねにてやはんべらん、また地獄におつべき業にてやはんべらん、惣じてもて存知せざるなり云々」と続けられてゐる。此の文脈を尋ねるとこの

めてくださる慈悲に存する。その佛願の生起本末を聞いて疑はざるが信心なるが故に、信心の中には念佛と共に淨土に往生せしめられる佛の本願力が証されてゐるのであり、淨土に生まれやうか地獄におちやうかどちらになるかわからないなどといふ曖昧な事は存しない筈である。然るに祖聖が敢て之を「惣じてもて存知せざるなり」と言はれるのは、蓋し質問者が或は一念義に立ち或は多念義に立ちて互に相譲らず、互に己れの立場こそ淨土に往生すべき道であれ、対者の立場は之に反して結局地獄に墮つる業に他ならないと主張する、則ち各自己の思慮分別を以てはからひ、所謂自見の覚悟に執着してゐるその心根を見抜き給ひて、一刀の下に之を截断してしまはれたのである。まことに淨土往生の道はわれら凡夫の自のほからひを以て能く明らめ得べきところではない。念佛には無義を以て義となす、一切自のほからひを離れたところに其の根本の立場が存する。祖聖の御語は此の信から自然に流れ来るのであらう。其の源に如来の願力にたすけられまらせ自ら淨土に往生させていただくといふ信心の金剛の如くに藏せられてゐることとより言ふを要せぬことである。

此の金剛の信を内に藏してこそ、「たとひ法然上人にすかされまらせて地獄におちたりともさらに後悔すべからずさふらふ」といふ御語の流れ出づる趣が味ははれるやうである。祖聖の御口からかかる厳しい語の出でたまふたのは、恐らく質問者の口から念佛は地獄におつる業であると誹る一念義に偏れる意見が述べられたからであつたであらう。此の消

章はもと生命がけになつて「極樂往生の道を問ひ聞かんがため」に訪れ来つた求道者たちに祖聖御自の信を告白したまうた御言葉である。そして祖聖はここに念佛より他に往生の道をば知らないとは断はつてをられ、ただ念佛して彌陀にたすけられる、即ち往生させていただくばかりであると告げられるのである。然るに其処に直ちに念佛が淨土に生るる因であるのか、地獄におつる業であるのか、そんなことはすべて知らない、たとひ法然上人にだまされて念佛して地獄におちても後悔のおこる筈はない、云云と言はれるのは何故であらうか。此の御語をよりどころとして、祖聖はただ彌陀佛のお慈悲を聞いて念佛してをられただけであつて、淨土に往生するといふやうな事はもう問題にはなつてをられなかつたのだ、それはもうどうでもかまはない事になつてゐたのだ、と言ひ、念佛の信心の中に淨土往生といふ念を宿すのは何か不純の事のやうに云ふ者があるとすれば、是れ深く省み思ふべき事であらう。

彌陀の本願もとより「我が国に生れんと欲へ」と喚びたまふ。名号を成就してわれらに恵み賜はる所以は、其に由りて必ずわれらを彌陀佛の国に生まれしめんとである。此の本願を聞きまつる心は即ち如来の至心を信樂し、如来の悲願に順ひたてまつりて、如来の淨土に往生せしめられるところに安心する心である。即ち佛の願を起したまふ本が、われらの煩惱に狂ひ罪業に迷ひ漂ふところをみそなはせられたる智慧に存し、其の末は則ちわれらを淨土に生れしめ佛の正覺を証さし

息は恵信尼消息によりて確められる。言はく。

「山を出でて六角堂に百日籠らせ給て後世を祈らせ給けるに、九十五日の曉、聖徳太子の文を結びて示現にあづからせ給て候ければ、やがてその曉いでさせ給て、後世の助からんずるえん(縁?上人?)にあいまいらせんと尋ねまいらせて法然上人にあいまいらせて、又六角堂に籠らせ給て候けるやうに、又百か日降るにも照るにも如何なるだいふ(大風?大事?)にもまいりてありしに、ただ後世の事はよきにもあしきにも同じ様に生死出づべき道をばただ一筋に仰せられ候しをうけ給はり定めて候しかば、上人のわたらせ給はん処には人はいかにも申せ、たとひ惡道にわたらせ給べしと申とも、世々生々にも迷ひければこそありけめとまで思ひまいらす身なればと、様々に人の申候し時も仰せ候しなり。」

此によれば此の如き偏見は法然上人の時から既にあつたので別に新しい事ではない。そしてその時から祖聖は既に、たとひ法然上人に順ひて地獄におちたりとも後悔はできないと知つてをられたので、其のやうな人々の誂謗は遠く超えてをられたのである。世々生々に迷ひ漂ひきたれる生死の境を出で、後世にまた迷ふ恐れ無き境に入る、即ち淨土往生の道はただ彌陀の本願にたすけられまらする念佛の一途のみである。其の他には「いづれの行も及び難き身なれば、とても地獄は一定すみか」だからである。執持鈔にも祖聖の御語として「往生ほどの一大事凡夫のほからふべき事にあらず、ひとすぢに如来にまかせたてまつるべし」「さればわれらとして

淨土へまゐるべしともまた地獄へゆくべしともさだむべからず、故聖人のおほせに、源空があらん処へゆかんと思はるべしと確かに承はりし上は、たとひ地獄なりとも故聖人のわたせたまふ処へまゐるべしと思ふなり」云云と伝へられてある。(數異抄は祖聖の御語を端的に執持鈔は其に含まれたる御意を布衍して、お伝へくだされたやうである)此等に照らしあはせて思うても祖聖の御信心の中に淨土往生といふ事はつきりと伺はれると共に、其がはつきりすればするほど愈々地獄におちても後悔はできないといふ御意の味ひが伺はれるやうである。

思ふに南無阿彌陀佛の響き流るところ即ち如来の大慈大悲の誓願が願はれ働いてゐて下さる、即ち如来の光明が無碍に照りてわれらを攝取して下さる。其は業苦に悩む衆生をあくまでも捨てず必ず清淨安樂の覺を得しめると告げてくださる。如来の大悲心はこの名号において成就せられてゐる事が感ぜられる。流轉六道の如何なる境界にありても大悲の御名の聞こゆるところ其処が即ち淨土の無碍の光明の照るところとして其処なる一切の悪は空ぜられ轉ぜられて清淨なる功德を成らしめられるのである。所謂地獄の猛火も化して清く涼しき風となると説かれてある。われ等の煩惱罪業はまことに地獄を造り造りて果てもないことであるが、佛の名号の聞こゆるところ煩惱はれ菩提を感じしめる縁であり、地獄はれ淨土に遊ばしめる処である。然れば地獄に墮つるを恐れや

る。何が故に淨土の建立が即ち本願の大悲心の成就なのであるか。例へば法藏菩薩の発したまへる四十八願の最初の願に言はく、設ひ我佛たるを得んとも、国に地獄、餓鬼、畜生あらば、正覺を取らじと。韋提希夫人の世尊に訴ふる語に云はく、唯願はくば、世尊よ、我がために広く憂悩なき処を説きたまへ、我れ当に往生すべし、閻浮提濁惡世をば樂はず此の濁惡の処には地獄餓鬼畜生みち満ちて不善の聚多し、願はくば我れ未來に惡声を聞かず惡人を見ざらん。この韋提希の訴は己れが惡人たるを覺らざる一切の煩惱の凡夫の訴である。自ら三惡道を造り漂ひつづ之を厭ひ惡むより他あり得ず、自ら之を厭ひ惡みつづ而も自ら之を造り迷ひ狂ふより他あり得ざる業苦の衆生の狂ひ乱れたる訴である。然るに如来はかねてより之をしろしめすが故に十劫の古既に三惡道無き淨土を建立したまひ、我が国に來れよと招き喚びまします。凡そ淨土の一切の莊嚴は一一皆是れ如来の願力の成らしめたまふところ、苦惱の有情を捨て得ざる大悲心より起こさしめたまふところに他ならない。大悲心もとより無漏清淨なるが故に大悲心より建立せられたる国土亦無漏清淨である。淨土無漏なるが故に其処に往生せる衆生亦自然にその清淨の徳に化せられて無漏の徳を成就する。即ち亦如来眞實の覺を証し、佛と成らしめられる、かく煩惱の凡夫をして必ず佛の覺を成らしめたまふもの、是れ實に淨土の自然の徳にして即ち如来の本願の成就せしめたまふところ、亦是れ南無阿彌陀佛の名号のわれらに告げ証したまふところである。

うや。

阿闍世王の云はく、世尊よ、私がもし如来世尊にお遇ひもうしませんでしたならば、當に無量阿僧祇劫に於て大地獄に在りて無量の苦を受けただでありませう、ですのに私は今は佛にまみえまつりました。かうして佛にまみえまつりて得させただけでございました。功徳を以て衆生のあらゆる煩惱惡心を破壊してしまひませう。佛の言はく、大王よ、善いかな善いかな、私は今こそ汝が必ず衆生の惡心を破壊してしまふことができるかと知つてゐる。王の云はく、世尊よ、若し私が審かに衆生の諸の惡心を破壊することのできるものでありますれば、私は常に阿鼻地獄に在りて無量劫の中に諸の衆生のために大苦惱を受けませうとも、其を苦しいとはおもひません、と。一「地獄におちたりとも更に後悔すべからずさふらふ」といふ勇健極みなき御語の奥に、本願の名号の無碍の威神力が照り輝いてゐるのである。則ち尽十方無碍光如来に歸命し、無量光明土に遊ばしめられる信心の消息を窺ひまつり得やうか。

眞に大悲心は名号の廻向によりて成就せられる。その名号は不断にわれらを喚びて我が国に生れんと欲へと促してくださる、即ち西方極樂淨土にわれらを往生せしめたまはらふのである。然れば名号の本願を聞く心は亦自ら往生淨土を欲ふ、是れ自然である。本願の力自然にしてわれらを淨土に到らしめたまふのである。之によりて又本願力は即ち淨土の建立せられたるところに成就せられたのであることが窺はれ

和讃にのたまはく、

南無阿彌陀佛の廻向の 思徳広大不思議にて、

往相廻向の利益には 還相廻向に廻入せり。

往相廻向の大慈より 還相廻向の大悲をう、

如来の廻向なかりせば 淨土の菩提はいかがせん。

淨土の菩提、是れわれら一切苦惱の有情を導いて赴き到らしめたまふ如来の究竟の徳である。覺である、涅槃である。一切の煩惱残りなく寂滅して智慧の光明碍り無く照り、慈悲の壽命際り無く生きゆく大いなる活動である。是れ淨土の徳の自然である、是れ大悲心の成就である。

如来の淨土を建立せられたると名号を獲得せられたると共に、是れ煩惱具足のわれらに同じたまへる大悲の願心より成就せられたのである。われ等の現に住する此土を去ること十萬億佛土といはるる程に遙かに遙かにわれらの境界を超え離れたる清き覺りの境界を建てらるると共に、その境界にわれらを必ず導き入れしめんとて御名告りをあけて朝に夕にわれらを招き喚びたまふ。まことに「久遠劫よりこの世まで あはれみまします」大悲心の御作用であらせられる。南無阿彌陀佛をいただきて即ち淨土を憶念せしめられ、淨土の光耀に照らされて此土の山川草木禽獸虫魚の一切の上に等しく如来の悲愍したまふ佛子なり同胞なりの感を覺えしめられ、歩々に往生の一道を辿らしめられる、是れ大悲心の成就を親しく味ははしめられるものである。煩惱に狂ひ罪業に乱るるわれら

は久遠の昔より今日今時に至るまで、歩々ただ惡道にさまよふ因業を積み重ねるばかりであつたし、其の果報はまた未來際を尽くして遂に出離の縁無きを知らしめられる。此の如くにあさましさ限りなきわれらであることを、佛かねて知ろしめして救はんと誓ひたせたまひ、則ち淨土を建立してわれらの究竟成佛の境を定めしめたまひ、則ち名号を獲得して如来の全徳をわれらに廻向したまふ。如来の大悲の御心はここに成就せられたまへるのである。

此の如く「大悲心をば成就せり」の御語を名号の廻向と淨土の建立との二面から窺ひ來りて往生淨土の信の道、即ち祖聖の教を省みまつたのであるが、今これをもうすこし近くわれらの日常の心の上に照らしあはせ省みてこの筆をおかうと思ふ。

前に「如来の作願」と題したる拙稿の中にくりかへし述べたやうに、われわれは眞面目にならうと思つてもなり得ず、怨み心から離れやうと思つても離れ得ざる者であるが、このわれらの有様を佛の御教に照らして承れば、是れ決して昨日や今日偶然にこのやうになつたのではなくして、其の由つて來るところ遠く、随つて其の続き行く末も久しからざるを得ないのである。則ち遙かなる昔から迷ひ來り、行く末永く迷はずにはをられぬ綿々たる業因果の流に他ならないのである。かく三世に互つて眞面目になり得ず怨み心から離れ得ず、則ち自ら迷ひ他を痛め世を禍するより他あり得ないわれ

といふのではない。それで宜しい。ならば始めから何も問題はなかつたであらうし、如来の御苦勞も要なきことであつたであらう。それではいけない故にこそ如来われらがために五劫に思惟し永劫に修行し給ひて名号を獲得し廻向し下されたのである。是れひとへにわれらがあさましさ際なきが故に苦悩の隙なきが故に之を救ひて安樂ならしめんとの御願ひから來りたまつた事である。この御願ひを聞かされたのであれば、あさましくてもわろくてもかまはないといふのではない、あさましくわるい根性言行から脱却せねばならないのに其の悩みを私の方よりもつと早くもつと深くみそなはして遙かなる古から救はんと苦勞し來りましたその如来の御慈悲に安らはせていただくのである。同時にまた安らはせていただく上は眞面目にならねばならない、怨み心から離れねばならないと云ふでもない。寧ろ然様な「ねばならない」とか「でもかまはない」とかいふ自力剛情の励みや放逸無慚の我慢の念から解放されてしまつて、ただ如来の願心にはぐくまれまゐらすのである。「よきこともあしきことも業報にさしまかせてひとへに本願をたのみまゐらす」ばかりである。

信 味 點 滴

數 異 抄 讚 歌

こよなくも くしき みたから

編 者

昭和二六・一・一六・ 坂町 泥華室にて

らの生命の有様を、佛智あきらかに照らしみそなはしてはこの苦悩の有情を捨てたまひ得ず、必ず救ひて御身と同躰の覺を成らしめずにはおかぬと誓ひたせたまつた。かかる御誓ひをわれら己が身の上に聞かせていただく。われらの眞面目なり得ざる根性の故に、怨み心の離れ得ざる根性の故に、かくまでも御同情下され御苦勞下された佛心を聞かせていただく。是れ南無阿彌陀佛のおんいはれを聞かせていただくのである。是れ究竟してわれらを淨土に招きたまふ御慈悲を聞かせていただくのである。但し之を聞かせていただくところに眞面目になり得ず怨み心を離れ得ない私の根性がすぐに眞面目になるとか怨み心から離れてしまふとかいふのではない、否、却つてその眞面目になり得ず怨み心を離れ得ない根性がいよいよ明らかになり得ず怨み心を離れ得ない程を知らない傲慢な心なのであつて、自分でどうしたつて眞面目になり怨み心を離れてしまふ事などできない根性の者であると徹底して知られてくる、同時に眞面目にならうとか怨み心を離れやうといふ焦燥心も無くなつてくる。然様にあせるのでなく、あせつてもどうしても然様にはなり得ないあさましい私をかねて知ろしめして、怒れみ救ふと誓はせたまつた佛心の大悲を仰ぎまゐらせるばかりである。その大悲心の中に怨み心も不眞面目な行も融かされ融かされ慚ぢ愧ぢしめられてただ南無阿彌陀佛と安らはせていただく。安らはせていただくのは、不眞面目でもかまはない、怨み心が起つても宜しい

如来の本願をたのみまゐらせ南無阿彌陀佛に安らはせていただく。ここにわれらにとりて新しい生活がひらかれる。

今までは久遠劫よりこのかた無明の煩惱を源とせる業因果の綿々たる濁流をなしたつた生命であつたし、随つて行末永く罪惡業苦を脱れ得ぬ性質のものであつたのに、今はそれら一切を根源から怒み救ひ清め給ふ如来の願力に攝め取られまゐらせて名号を源とせる生命に轉じさせていただいた、随つて自分の業苦の生命の流れの全体が大悲の御願に順ひて流れしめられる、則ち日々の歩みが究竟して如来の淨土に往き生れしめられるといふ根本義を帯びしめられ、淨土から惠まれる永遠の希望に照らされて進んでゆくのである。その道は蓋し如来の御願を聞きて其に随ひまゐらるところに開かれると共に日々現在の自分を省みては慚ぢ愧ぢしめられるところになるであらう。古人が念念に称名せしめられつつ常に懺悔せしめられつつある自己を告白し得たのは如来の大願の中に攝め取られ安らはしめられた者のおのづからなる心であらう。

ここに みちみつ。

さへられぬ とはのみひかり

ここに かがやく。

きよらにて つきぬましみつ

ここに わきいづ。

旅人よ あぶきみよ

よにまれし ねがひ みてらふ。

旅人よ とりてよめ

とばのやみ そこに ひらけむ。

旅人よ くみてとれ

かはけるみ ところに うるほふ。

ひかりあやなす まことのことば

あめつちの はてばてまでも

ひたぶるに われば たたへむ

二河白道の譬喩に、四五寸の白道とある。親鸞聖人はこれを釈されて、四とは四大(地・水・火・風)なり、五とは五蘊(色・受・想・行・識)なりとされてある。即ち私共の身体と精神の全体である。この身心の全体が彌陀佛の「我能く汝を護らむ」の慈光に照らし出されて、四五寸の白道がひらける。丁度光力を失つた月が太陽の光線に照らされて夜空に月光を放つと同様である。

た。彼の涙が塵びに轉ずるのを見て佛陀は一本の箒を與へ給ひ

「塵を払はむ、垢を除かむ」

と繰り返して乍ら精舎を掃除せよ、と命じられた。彼は朝早くから日暮まで箒木を手にして「塵を払はむ、垢を除かむ」と高らかに唱へ続けた。そのうちに木の実が熟するやうに佛の御心が徹到した。即ち、塵とは何か、垢とは何か、自分の愚鈍さである、それをこそ憐み慈しまれる佛の御心こそ、払はむ、除かむと絶えざる御苦勞がましましたのか、呆れ給はず捨て給はぬ無限の御眞実はひとへに我が上に注がれてあつたのか、と涙にくれたのである。

愚さ故の卑屈と限りないあせりともがきは、無限に注ぎかけて下さる大慈悲に洗はれて、ハントクの姿は再轉した。その悠然とした容姿に兄マカハンダカは驚いて「汝は最早さとり得たのか」と問ひかけたが、ハントクは莞爾として微笑するのみであつた。佛心に直參する者は他の賞讃も印可も不要である。兄は彼のさとの愈々深いのに驚歎するばかりであつた。

愚者ハントクの救済に對比して、四辯才第一の稱あるマカクチラの救済を憶ふ。彼は智慧第一の舍利弗の叔父である。彼も智慧がすぐれて長年研学して郷里に帰ると、舍利弗が出家したと聞いて、王舎城の竹林精舎に詣で世尊にまみえた。世尊は黙して端坐せられてゐる。クチラも黙したままである。といふのはクチラの心に「一切の説は否定することが出来る」と確信してゐるから、世尊が何か説かれたら早速否定

慈とは拔苦であり、悲とは興樂である。慈悲の御目あては、苦を抜き得ない者、眞の樂を得られない者である。

佛弟子中愚者の代表はハントクであつた。一句の法文を三月かかつても暗唱出来ないで附近の牧童が先に覚えてしまふ始末であつた。世間からは「愚路、愚路」とさげすまれた。兄のマカハンダカも遂にしびれを切らして彼を祇園精舎の門外に追ひ出し「佛法の器でない」と苛責した。ハントクは世間がどんなに悪罵しても、兄から叱責されても、自分がどんなに努力しても、自分の愚鈍さをどうすることも出来なかつた。祇園精舎の門外をうろろしながら「どうせうぞいのう、どうせうぞいのう」と悲泣し続けるばかりであつた。

佛陀は彼の歎声をきかれて大悲の御姿をもつて彼の前に立ち給ふた。フト仰ぐ佛陀の慈顔に彼は長跪合掌した。すると佛陀は「ハントクよ歎くことはいい。愚者が愚者と知るは眞の智者である。愚者のくせに智者と思つてゐるのが眞の愚者である」

と懇ろに訓へられた。愚鈍さをもて余して歎き悲しむハントクの心に光が射した。「一曲つた松の枝」を「一曲つた松の枝」と見るが正しい見方であつたのか。愚鈍な者が愚鈍でなくなるのが佛道ではなかつたのか、愚鈍な身を愚鈍な身と照らして下さるのが佛の御智慧であつたのか。そこに彼の心は一轉した。愚鈍な身を持ち乍ら何とかならうとして困つた困つたなけいてゐるが、それが身の程を知らぬことであつ

しやうと待ち構へてゐるからであつた。世尊はこの心をよく見抜いてゐられるから一語も発せられない。数刻すぎたのちに、クチラは訪づれたのは自分である所から

「私は一切の説を認めない」と口を開いた。世尊はすかさず、

「汝は一切の説を認めないと云ふが、其の認めないといふことが汝の自説ではないか。唯自分の説だけを認めて、理由なく他の説を認めないといふのは、既に邪見の毒を飲んでゐるではないか」と仰せられた。彼は世尊の従容として迫らざる御態度の中に、電光のやうに鋭く自説の邪見を指適されて、ここに大いに懺悔すると共に、佛弟子として今日なほ其の徳を仰がれる人となつた。

智者から邪見の毒が消され、愚者から卑屈の垢が洗はれて、「如来は一切の智愚の毒を滅す」る不思議があらはれる。そこに智者は智者なりに、愚者は愚者なりに、自利他利されて行く不滅の光明が点せられる。

老婆が小供二人を連れて橋を渡つてゐるが、あやまつて老婆は河に落ちた。早速兄はそのまゝ、河に飛び込んで母を救はうとしたが、溺死の母は兄に必死にしがみついたので共に溺れるばかりであつた。

弟は走つて橋を渡つて行くので母と兄を見捨てるのかと思ふと、橋のたもと舟を見出し溺れる二人を救ひ上げた。聖道と淨土の慈悲の差である。

編集後記

一月初めの中外紙の眞溪社主の日記に「巢鴨刑務所に今なほ千五百人の戦犯者が收容されてゐるが、そのうち四百人が眞宗信仰を求めて白蓮会を結び、或日集合した四百の人々が、佛像はもとより佛華佛香一つもない場所に静然と端坐して、正信偈を誦して念佛を唱和してゐた。看視の人々も皆感涙にむせんだことであるが、歎異抄や正信偈の講義や讃仰の良書があれば是非この人々に差入れてほしい」と誌されてあつた。一読して私も胸をえぐられる思いがして未だに消えません。慈光誌を早速若干部づつ差入れて読んで頂くやう差入方法を交渉してゐますが皆様方も許される限り御手元に良書がありましたら御差入れを願ひます。交渉先は東京都西巢鴨、巢鴨アリズン特別警備隊本部、林勝臣殿です。

△「舍衛城の悲劇とカピラ城の滅亡」は大國ソ連と米国の間にある日本の現状、漸次迫迫して来る国際情勢のきびしさに鑑み、大暴風雨に曝らされねばならぬ我等の業報の誠に深遠なるを思ひ、同時に佛陀の御心は如何様に現在の我等をみそなはし給ふかを仰ぐよすがといたしました。そこに我等佛徒の歩むべき永劫の道を発見して下されば幸甚であります。

△「大悲心の成就」は白井成允先生が四十日

の御病床からお起き下されて、年頭御心を盡して御誌し下されたのであります。「苦惱の有情」をみそなはし、悲心切々として法蔵の志願は燃え、淨土を建立し、名号を獲得しましたして、われらを悲引して下さる消息を克明にお知らせ下さつてあります。

われらともすれば一念義にかたより、或は多念義に墮し、如來の大きいなる御はからひを知らず、われこそは眞の念佛者なり、眞の往生者なりと思ひこんでゐるまんま、本願の御意趣にそむく、何といふ愚かしさ何といふあさましさでありませうか。

「他のことは一切駄目だが信心ばかりは」ときめてゐた老婆が「自分がよいと思ふのがわるいのだ」との近角先生の訓へに氣づき、驚いて信の大海に帰したとの話を近角常普先生から承つたことがあります。

法縁御紹介

山下成一先生、毎月二日と十七日。縣下知多郡常滑町市場、御自宅。

本多惠孝師、毎月六日と二十八日午前午後。

求道会は第一日曜。第一信仰会は第二日曜。第二信仰会は第三日曜。

名古屋市中村区岩塚町、林高寺。御自坊。

花田記

× × ×

× × ×

昭和二十六年二月十日 印刷
昭和二十六年二月十五日 發行
毎月一回十五日發行
定價 一部金拾五円(郵税共)
一年分金百八拾四(郵税共)

名古屋市南区駈上町二ノ二八

編集兼 花田正夫
發行人

名古屋市千種區千種町馬走二八

印刷人 本田政雄

名古屋市千種區千種町馬走二八

印刷所 千草印刷所

名古屋市南区駈上町二ノ二八

一道會館

發行所 慈光社

振替口座番號 名古屋一〇四七〇番

慈光第三卷 第五號 昭和二十六年二月十五日發行(毎月一回十五日發行)

昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可